

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	須藤 秀平
論文題目	近代ドイツ文学における「フォルク」概念の諸相——クライスト、ゲレス、アイヒェンドルフ		
（論文内容の要旨） 本学位請求論文は、18世紀末から19世紀初頭にかけてのドイツ語圏において「フォルク」（民族／民衆）の概念にどのような内実が付与されていたかという問題に、文学研究の領域から取り組んだものである。20世紀のナチズムの時代に称揚された「民族」としてのフォルク概念が問題視されるとき、その源流としてしばしば19世紀初頭のドイツ・ロマン主義が名指しされてきた。しかし、その時代の作品を丹念に読み解くと、当時愛国主義的な立場をとっていた作家の作品においてすら、「フォルク」が「民族」の意味で一義的に捉えられているわけではないことがわかる。19世紀初頭の作家たちは「フォルク」を下層民をも含む「国民」一般と重ね、さらにはそれを文学ないし言論の「受容者」と見なしていたのである。この「受容者としてのフォルク」という観点から、本論文は、当時のロマン主義者ないしナショナリストと見なしうる作家たちが「フォルク」という言葉でかならずしも「民族」を理想化したわけではないこと、そしてまた、近代文明の悪弊に染まっていない自然な「民衆」を礼賛したのでもないことを明らかにしていく。 本論文は、大きく分けて三つの部分から構成される。第一章と第二章はハインリヒ・フォン・クライスト、第三章と第四章はヨーゼフ・ゲレス、第五章と第六章はヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフに関する考察にそれぞれ当てられている。 第一章では、貴族であったクライストが自らの出自に抗して、市民として、さらにはは民衆としての生き方を夢見ながら、他方で同時代のロマン主義者とは異なり「フォルク」を「民衆」の意味で理想化していないことが、彼の初期の手紙および小説『チリの地震』の読解から明らかにされる。クライストにとってフォルクとは「群衆」であり、それが小説のなかで20世紀の群衆論を先取りする形で描かれているのである。第二章では、この「群衆」としてのフォルク観が、クライストにおいて国民共同体のイメージ形成にも大きく関わっていることを考察している。対仏解放戦争を鼓舞する意図で書かれたとされる戯曲『ヘルマンの戦い』でも、「フォルク」は称揚すべき「民族」ではなく「群衆」として描かれており、その「群衆」こそが指導者を承認し、戦いに意義を与えるとされる。 第三章では、共和主義者を自称するゲレスが、彼の考える「真の国民新聞」を通して民衆の声による国政改革の可能性を追求したことが示される。識字率の上昇に伴う読者層の拡大という社会史的出来事を背景に、ゲレスは「フォルク」を公権力の監視者と位置づけ、そうすることで「フォルク」を当時の公共圏に取り込もうとした。第四章では、1806年以降のゲレスが、民族の文学は「フォルク」による受容を通して選別されたと考えていたことが、ゲレスの『ドイツ民衆本』を読み解くことで明らかにされ、さらに、このゲレスの考えが、民衆文学と取り組んだ同時代の盛期ロマン主義者の中にあって、民衆文学の保護を目指したアルニムやグリム兄弟らの試みとは一線を画すものであると論じられる。 第五章が考察の対象とするのは、アイヒェンドルフの初期の長編小説『予感と現在』と晩年の文学史論とに共通して見られる理想的詩人像・読者像である。文学において創作以上に受容を重視したアイヒェンドルフは、同時代の文学の大衆化に対抗するために理想的詩人と理想的読者とを重ねあわせ、「民衆」による読書、あるいは民衆的な読書			

に期待を寄せた。その際批判されるのは読者に媚びる詩人と、そのような詩人を褒めそやす読者であり、アイヒェンドルフがそのアンチテーゼとして、自分の人生の問題として主体的に詩作する詩人と主体的に読書する民衆を要請していたことが示される。第六章ではしかし、1830年代における中期アイヒェンドルフが詩人法学者として同時代の社会状況と取り組むなかで「フォルク」に対しアンビヴァレントな感情を抱いていたことが明らかにされる。長編小説『詩人とその仲間たち』において、素朴な民謡を讃えることで「民衆」を理想化するかに見えたアイヒェンドルフであるが、民謡が歌われる山中の牧歌的な世界は時代から取り残されたユートピアとして描かれている。また、民衆に政治的解放の理念を説く教養人と民衆の乖離が語られており、教養人の演説を聞く民衆が「観衆」ないし「公衆」として教養人の予期しなかった暴力的行動を起こすことから、国民共同体を求めるアイヒェンドルフ自身が「民衆」を無批判的に理想化することができなくなっていることが示唆される。

以上の考察から、19世紀初頭のロマン主義者あるいはナショナリストと見なしうる作家たちが国民共同体を志向する際にならずしも「民族」を理想化していたわけではないこと、むしろ「フォルク」を受容者という、理念上の存在にとどまらない実体としての存在と捉えることで近代市民社会における「公衆」の問題に深く関わっていたことが明らかにされる。それは同時に、のちの民族至上主義の源流として一括りにできない多義性をはらんだ「フォルク」概念の発見でもあった。

(論文審査の結果の要旨)

1800年前後のドイツ・ロマン主義をナチズムの熱狂的民族至上主義の源流と見なす見解は、すでに定説となっていると言ってよい。H・プレスナーが『市民時代末期のドイツ精神の運命』(1935)[のちに『遅れてきた国民』と改題]で指摘し、P・ヴィーレックが『メタポリティックス——ロマン主義からヒトラーへ』(1941)で詳述し、戦後はJ・L・モッセが『ドイツ・イデオロギーの危機——第三帝国の知的起源』(1964)で追認したこの見解に、申請者は正面から異を唱える。通常「民族／民衆」として理解される「フォルク」概念であるが、申請者によれば、ドイツ・ロマン主義の「フォルク」概念に、ナチズムの民族至上主義に直結するような「民族」の理想化を一義的に見出すことはできない。個々の作家、著述家の「フォルク」概念を子細に検討すれば、そこには「民族」として理想化されるものとは異なるフォルク像が独自に提示されており、それがドイツ・ナショナリズムの成立と発展を促した形跡はない、というのである。ドイツ・ロマン主義とナショナリズムの関係をめぐる従来の説への大胆な挑戦であるが、申請者は作品の丹念な読解を通して自説を説得的に論証することに成功している。

申請者が自説を論証するために選んだのは、ドイツ愛国主義者と見なしうる三人のロマン主義者である。第一章と第二章では、ナポレオン率いるフランスへの激しい対抗心を抱いていた劇作家・小説家クライストを取り上げ、小説『チリの地震』に描かれたフォルクが「下層民」でも理想化された「民衆」でもなく、近代的な現象としての「群衆」であることをつきとめたあと、愛国劇『ヘルマンの戦い』においても、劇中のフォルクが「ドイツ民族」として称揚されるのではなく、「群衆」として、しかも統治者の行動への「審判者」の役割を担う「群衆」として描かれていることを明らかにした。これは、従来素朴な愛国的プロパガンダ劇と見なされてきた『ヘルマンの戦い』に重大な解釈の変更を迫る成果であり、この成果は独立した作品研究としても、今後のクライスト研究に大きな影響を与えるにちがいない。

次に申請者が取り上げるのは、グリム兄弟に先駆けて「民衆本」の蒐集活動に携わり、「神話的民族」としてのフォルク像を提示したとされるジャーナリスト、ゲレスである。第三章では、新聞によって統治者の不正を告発しようとしたゲレスの試みにおいて、その告発は「民衆」としてのフォルクの存在を前提としたものであり、そこでフォルクは統治者に対する「監視者」の役割を要請されていたことが示される。第四章では、ゲレスの民衆文学への取り組みが、ドイツ的なものの起源としてのフォルクを「保護」しようとしたアルニムやグリム兄弟の取り組みとは異なり、フォルクが文学の「受容者」として内容の選別に主体的に関わることを想定していたことが示される。いずれの章においても、保守的ロマン主義者と見なされることの多いゲレスのフォルク像が、「監視者」および主体的「受容者」として、民族主義とは異なる位相で明確に提示されている。

最後に申請者は、反近代の姿勢で民衆的なものを称揚した詩人アイヒェンドルフを取り上げる。第五章では、文学の創作以上にその受容を重視したアイヒェンドルフが、上流貴族をはじめとする教養俗物を批判する一方で、主体的に読書する「民衆」としてのフォルクを理想の読者と見なししていたことが示されるが、第六章ではしかし、その後の政治的状況の変化の中で、詩人法学者としてドイツ統一への道を探っていたアイヒェンドルフが、「観衆／公衆」としてのフォルクを、国民共同体の構成員として必ずしも理想視することができなくなった事態が示される。第六章における考察は、素朴な民衆詩人と見なされることの多いアイヒェンドルフの政治的側面を明らかにしただけでなく、これまでのアイヒェンドルフ研究において分離していた政治思

想史研究と作品研究を統合したものとしても、その意義を認めることができる。

以上のように、本論文は、愛国主義的と呼んでいいドイツのロマン主義者たちのフォルク像が、従来言われているように「民族」としてのフォルクの理想化でないだけでなく、「民衆」としてのフォルクの理想化ですらなかったことを明らかにした。その論述は先行研究を精査した上でなされており、きわめて堅実なものである。ときに堅実すぎて先行研究の視点にとらわれすぎるきらいがないでもないが、識字率についての社会史的考察をも視野に入れ、作品に表出する作家、著述家の心情の襞を丹念に読み解くその姿勢は、文学研究としての幅と深さを兼ね備えており、非常に優れたものと言いうことができる。審査の過程で、取り上げた三人のロマン主義者の選択に対する疑問から、本論文の別の可能性として「フォルク」概念の多義性を正面から論ずることもできたのではないかという指摘もあったが、それは今後の課題と言うべきであろう。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年12月16日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降